

家庭科

中学校家庭科における幼児とのふれあい体験学習の効果

—自分自身を見つめる指導のあり方を探る—

藤井志保

1 はじめに

少子高齢化が進み、地域でも異年齢の子ども同士のかかわりが減っている社会状況の中で「幼児とのふれあい」は、子どもたちにとって必要不可欠な体験である。本校の家庭科における幼児とのふれあい体験のねらいは、「幼児の発達について学ぶこと」「幼児という年齢差のある人のかかわりかたを学ぶこと」「自分の幼い頃も振り返り自分自身のこれまでの成長を見つめること」等、単に幼児の心身の発達を学ぶことだけではなく、幼児とペアを組み実践的体験的に学ぶことで、最終的には自分の幼い頃を振り返り、これまで多くの人に支えられてきたことに気づくことができると考えている。そして、学びのゴールを「生活実践力を身につけること」とし、「自立と共生」を目指している。自分自身を見つめて自分は家族をはじめとする多くの人に支えられて今の自分がここにあることを少しでも実感して中学校卒業後の日々の生活に生かしていける子どもたちに成長してくれたらと考えている。

さらに「衣生活」とも結びつけて幼児の未来を見通して、将来にわたって使えるバンダナをプレゼントする。手づくりで布製品を作る機会が減っている中で、手縫いの基本的技能の定着もはかることができる。またこの活動を通じて、プレゼントを受け取った幼児の喜びが自分の喜びにもなるような体験ができる。幼児の家族へも手紙を送る予定である。このように、本題材はこれからの生活も見通しながら、幼児とのかかわりそしてその家族、衣生活に関する事など、自分を見つめながら総合的に学ぶことのできるものであり、その

学びの効果を本稿でも検証し、さらに今後は深化・発展させていきたいと考えている。

また本題材は、家庭科と「希望(のぞみ)」の学習内容を関連させて取り組んでいる。家庭科では、幼児期の心身の発達について学ぶ。その学びを生かし、幼稚園の年中児とペアを組み運動会で共に踊るなど、1年間継続してふれあう。家庭科の時間に幼児の心身の発達について学んだことを、実際に幼児とのふれあいと結びつけどのようにしたらよりよくかかわることができるかを自分自身であるいは仲間と交流しながら学ぶ。この実践的体験的な活動を通して「人と人のかかわり」「自分を見つめること」ことを学習の重点事項としたことが特徴である。

生徒は中学校8年生である。三原学園には幼稚園、小学校そして中学校と3つの学校園があり、12年間の幼小中一貫教育を行っている。筆者が本学園へ赴任して12年の月日が流れた。つまり現在、家庭科の授業で幼児とのふれあい体験を行っている子どもたちは、自分が幼児期に中学生とふれあい体験を行っている子どもたちである。よって、幼児期に自分がしてもらった事を今度は幼児さんへしていつている。

プレゼント相手のペア幼児は、隣接する附属幼稚園の年中児である。ペアとして5月に出会い、これまでいっしょに遊んだり、運動会で共に踊ったり、6~7回のふれあい体験を重ねる中で、幼児の心身の発達についても学んできた。特に運動会のダンスは歌って踊りながら、一つ一つ丁寧に教えるなど、意欲的にかかわった。幼児の個性に合わせて接し方を工夫し、なかなか心を開いてくれない幼児に対しても粘り強くかかわる姿もあつ

た。このような幼児とのふれあい体験を1年間継続していった。直接交流は、短時間の交流も含めて10回くらいであり、幼小中運動会の後は、幼稚園の先生と担任の先生と家庭科担当とで連絡を取りながら、手紙の交換をするという間接交流の形をとった。今年度の最後の交流として、直接幼児への手作りのバンダナをプレゼントする予定である。

2 研究のねらい

本研究の目的は、教科の本質に根ざした資質・能力の中でも「様々な人とかかわり共に生きる力」「生活を自立的に営む力」を育む授業実践とその評価の方法を開発し、指導のあり方とその効果の妥当性を探ることである。家庭科においては、幼児についての学習を重ねながら、継続的に幼児とのふれあい体験学習を行い、また「希望(のぞみ)」の授業とも関連させて取り組んだ。その中で「幼児についてのイメージ調査」を1年間通して行い、その結果を子どもたち一人ひとりにフィードバックし、自分自身を見つめる時間をとった。

幼児とのふれあい体験が、子どもたちの学びにどのように効果的だったのか、生徒たちが自分の生活や生き方へどのように生かそうとしているのかを子どもたちの記述から見取っていく。

3 授業の実際

1年間の幼児に関する授業の流れとふれあい体験、そしてどの時期に調査を行ったかを表1に示す。学習内容は、幼児についての学びを一本貫く中に、人の成長として幼児の心身の発達や遊びなどを直接学ぶ内容があれば、幼児の視点から家庭生活を見つめ直し「幼児と食生活」「幼児と衣生活」「幼児と家族」というように、家庭生活の学びを人の成長という時間軸だけでなく、家庭生活を空間軸と捉えて衣食住や家族とのかかわりなどへも広げて実践的・体験的に学んでいくことにした。その場合に、ペア幼児のことは常に関連づけ

て学習を深めるようにした。

表1 学習の流れとその内容（●調査の時期）

時期	学習内容	時数	体験活動など	幼児とのふれあい	調査
4月	なぜ幼児について学ぶのか	1			●
	自分の幼い頃を振り返ろう	1	出会いのふれあい体験	出会い	●
5月 6月	幼児の心身の発達について学ぼう	6	運動会の取り組み ペア幼児と踊ろう	遊びと踊りの練習	
6月 7月	幼児の生活と遊びを知ろう	4	ペア幼児へバンダナのプレゼントを作ろう	運動会練習	●
7月 夏休み	幼児へのバンダナ作り(衣生活の学び:導入)				
12月	幼児の食生活を 知ろう	4	幼児に適したおやつを作ろう	ペアとの手紙交換	●
2月 3月	家族について考えよう	2	バンダナの展示会 ペア幼児の保護者からのメッセージ	バンダナのプレゼント	●

8年生の授業のガイダンスで、この1年間「幼児とのふれあい」を柱として学ぶことを伝え、まずは自分自身の幼い頃を振り返り、家族へも聞き取りを行ったりした。それを導入として、幼児の心身の発達について学んでいった。胎児期のことそして誕生してどのような過程を経て成長していくのかを、赤ちゃん人形での疑似体験、ビデオ、写真、資料、そして教師の体験談なども交えながら学んでいった。

生徒たちは、様々な家庭環境の中にいるので、投げかける言葉に配慮しながらも、人がどのような過程を経て成長していくのかを知識としても学び、それを実際に触れ合うペア幼児とのふれあいに生かしていくように、ペア幼児の様子を思い描かせながら授業を進めていった。

こうした授業の中で、実際に「自分自身を見つめる」ことのできる場面を次のように設けた。
 ①家族への聞き取り：自分が誕生したときのことやその時の家族の願いなどをインタビューしてくる。
 ②幼い頃大切にしていたものや生活の中でよく使っていたもの、描いた絵や文字などを持ってきてそれにまつわるエピソードや思い出、その時の自分を振り返って語り合う。

授業の中では、幼児の遊びや心の発達、体の

発達について学んでいく。例えば「〇歳頃はこのような絵を描いたりする。自我が芽生えてくる。ごっこ遊びをする。」など色々な事例を挙げて学んでいくがその場合に、幼少期の自分自身の体験をこの学びと重ねて語る時間を設けるようにした。図1は小学校のペアのお姉ちゃんが手作りでプレゼントしてくれた小物を今でも大切にケースに入れて持っていて、それを持って来たもので図2は幼い頃集めていた石や作った泥だんごを今でも大切にしているということを語っている時の様子である。

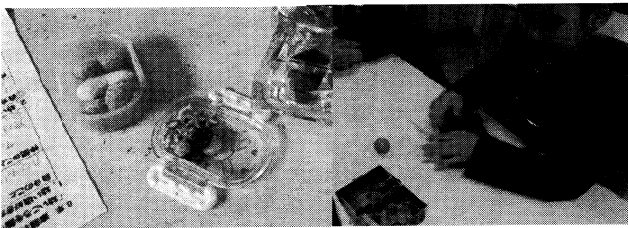


図1 幼児期から大切にしているもの

こうした学習を重ねながら、隣接する幼稚園の年中児とペアを決めて出会いを迎えた。中学生の人数に対して、園児の人数が少ないために、中学生2～3人と園児1人というグループでの活動となった。中学生にはペアの名前を伝えて実際にふれあう時にどんなことに注意すればよいかを交流したり、シミュレーションをして出会いの日を迎えた。そして、迎えたふれあい体験学習の様子は次のようなものであった。



図2 ペア幼児との出会いの日の様子

この後、家庭科の授業ではないが、運動会の幼小中合同演技をこのペア幼児と共に、グループで行った。本番を含めて6回にわたりペア幼児と共にふれあい踊りの練習を重ねていった。もちろん踊るだけではなく、その時の幼児の様子に応じて

遊びを取り入れ、コミュニケーションを深めていった。この時期に、家庭科の時間には、幼児の体の発達だけではなく、心の発達について学びを深め、幼児期の遊びや言葉とも関連させて学んだ。そうすることで、なかなか言葉が出ずに心を開いてくれない幼児への対応や、反対にいつも動き回って言うことを聞いてくれない幼児への対応なども、考えながら行うことができたようだ。

さらに、この運動会の取り組みが終了した後で幼児へのバンダナのプレゼントについて取り組みをはじめた。これは前述したように、単なる幼児へのプレゼント製作だけではなく、生活に役立つ小物作りとして、あるいは衣服の手入れの方法として手縫いの基礎なども学び直す機会とした。

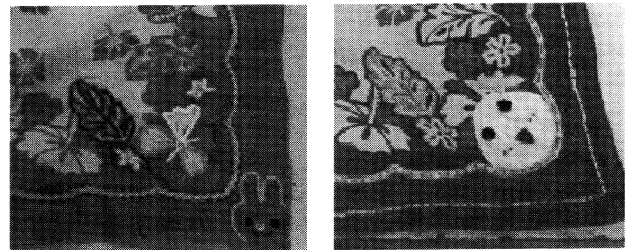


図3 市販のバンダナに刺しゅうをする



図4 バンダナの製作風景

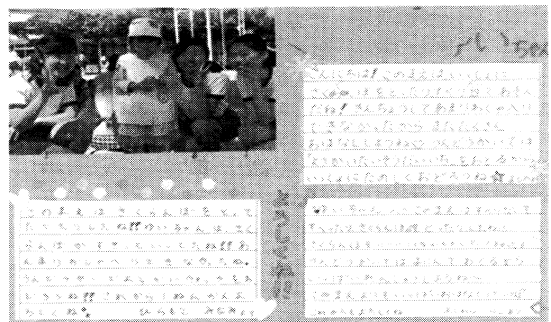


図5 幼児へのメッセージカードのプレゼント

4 調査内容とその結果分析

以上のような学習の過程において、5回の調査を実施することとした。(5回目は3月の予

定) 子どもたちの幼児について持っているイメージの変化を見取るために年間を通じて、幼児のイメージに関する調査 (SD 法) と幼児とのふれあいに関する生徒の記述式調査の 2 つを取り入れることにした。

幼児のイメージに関する調査 (SD 法) は、図 8 のように、幼児のイメージを 10 項目として、さらに、生徒自身が幼児に積極的にかかわったかを知るため、積極的・消極的の項目を追加し 11 項目とした。

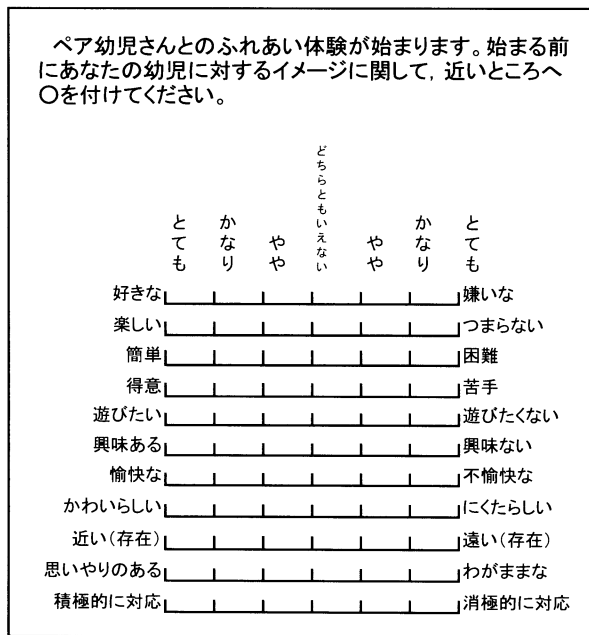


図 6 幼児のイメージ調査用紙

「幼児とのふれあい(記述式)」は、「気になった幼児の様子」: 幼児とのふれあいで印象に残ったこと、気づいたこと、「幼児への対応」: 上記の「気になった幼児の様子」に対して、生徒はどのようにかかわったかを記載するようにした。「私の心の中」: そのときの生徒の心の中の気持ち(本心)を記載する。素直な胸の内を記入する。例えば、「本当はかかわりたかったが、どのようにかかわってよいかわからなかった。」「うるさいなあ!」「少しはじっとしろ!」「かわいいな」「A のように関わったが、B のようにすればよかった。」など上記の 2 種類のプリントをふれあう前、ふれあう毎に 1 年間記録することとした。

これらを分析することにより、子どもたち一人ひとりの幼児とのふれあいの様子や幼児とかわり幼児を理解しようとする態度などの変容を見取った。そして、その変化と共に、授業の中で実際に「ペア幼児へのプレゼント製作」「幼児のためのおやつづくり」「自分と家族」というように、幼児とふれあった活動を、これからの自分の生活と結びつける場面を設けながら取り組んだ。

表 2 8 年生全体の幼児のイメージ調査結果 I

項目	a(好きな)	b(楽しい)	c(簡単)	d(得意)	e(遊びたい)	f(興味ある)
出会う前	5.0	4.9	3.5	4.2	5.0	4.9
出会った直後	5.8	5.9	3.6	4.6	5.9	5.7
10月	5.2	5.3	3.2	4.1	4.9	4.9
12月	5.3	5.2	3.2	4.1	5.0	5.0
項目	g(愉快的)	h(かわいらしい)	i(近い存在)	j(思いやりがある)	k(積極的に対応)	
出会う前	5.0	5.4	4.2	3.9	5.2	
出会った直後	5.7	6.1	5.0	4.9	5.8	
10月	4.9	5.5	4.3	4.4	5.2	
12月	5.1	5.6	4.3	4.5	5.5	

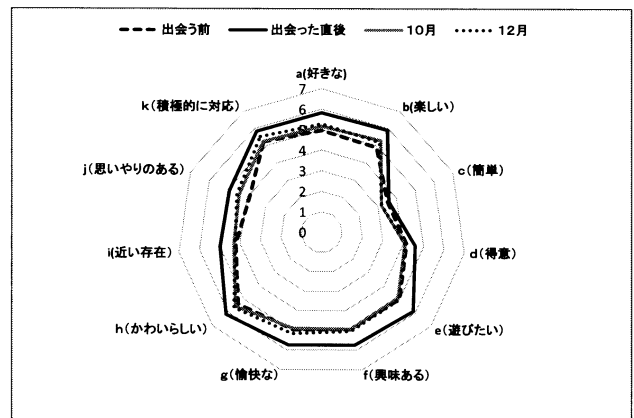


図 7 8 年生全体の幼児のイメージ調査結果 II

表 2 は、現在までに年間 4 回調査した学年全員の平均値と図 7 はそれをグラフに表したものである。この結果から言えることは、「好きな」「楽しい」「かわいらしい」という幼児に対して大きくイメージは事前も比較的高いが、さらにふれあった後も高くなっている。そして、「興味がある」「積極的に対応する」という関心意欲の数値も事前も同様に高く事後も増加している。いずれもペア幼児に出会う前は幼児に対するイメージは学年全体として高く、幼児とのふれあい体験に対して関心も高く意欲的に取り組もうとしていることが分かる。

この中で、「近い存在」「得意」については、イメージや関心意欲を問う数値よりもやや低い。これは、やはり日常的に幼い幼児が身近にいない生徒が多いことと、決してふれあうことに自信があるわけではなく、出会いの前は不安を抱えていたことが分かる。

そして、この中で一番はっきりと分かったことは、「簡単」の数値が事前事後と変化がなく一番低いことが注目される。幼児とふれあうことは決して「簡単ではない」と推測してのぞんだことである。そして、楽しくてもっと遊びたいと感じて、出会う前より出会った後の方がかわいらしいと感じているにもかかわらず、「簡単」の数値は変動しなかった。このことから、幼児の立場になって一生懸命対応したり、楽しく遊ぶことはできているが、困ったことやどう対応していいか分からないことや多くの課題を感じていることが分かる。

家庭科における課題対応能力とは、生活の中で困ったことやうまくいかないことに会った時に、他者（家族である場合も多い）と協力したりアイデアを出し合いながら、その状況や相手の立場になって考え工夫し、計画を立てたりしながら対応できる力である。生活の中には、このような事があふれている。

ここでは、多くの生徒が「もっとペア幼児さんと仲良くふれあうにはどうしたらいいのか」「なかなか話しても応じてくれないが、その場合はどうしたらいいのか」「〇〇くんは、楽しく笑顔で話しかけているけど僕はそれができていないのもっと頑張ろう」などと課題を感じたようである。

家庭科の時間は、席順を「ペア幼児さんとのグループ席」で学習を進めている。これは、教室で幼児についての学習を重ねていく際に、ふれあい体験の時の課題を共有して、中学生同士もコミュニケーションをとりながら、そのペア幼児さんとふれあうためである。

衣生活の学習のバンダナの製作で手縫いの基礎基本を学ぶ場面でも、ペア幼児さんとのグループでお互い教え合ったりしながら技能を向上させた。バンダナの布も、話し合っって選び、作り方などを

交流し、課題を解決しながら作業を進めていった。

12月の4回目の調査が終わった段階で、幼児との出会いからを振り返って、一人一人のイメージの変容をグラフにして提示することにした。

その時の授業では、まず調査用紙とその調査の目的を確認して、図7の学年全体のグラフを提示した。気付きを話し合わせたところ、学年全体としては幼児に興味関心が高く、積極的にふれ合っていたことが分かるが、「簡単」の数値が低いことにも注目していた。そこで、これを個別にグラフにして見てみようという話しをすると、これまでの調査にどのように答えたかを覚えているわけではなかったのも、その結果が楽しみな様子であった。次のように図6のイメージ調査結果を個別にグラフにして生徒へ提示した。そして、自分の1年間のイメージへの変化を見ることにした。生徒へは、12月までに4回調査している事、改めて項目を示して、自分では意識していなかった幼児へのイメージをグラフ化したものを見てみようという大変興味を持って、お互いのグラフを見ていた。このグラフを自分で見て、変容をつかみ、次の視点で考えさせた。

- 1) 出会う前と今の自分の変容を分析する。
- 2) 幼児とふれあって何を学べたと思うか。
- 3) 今後の自分にどのように生かされるか。

同じペアとふれあうグループで、共に自分たちの変化を見ることにした。次に示すのは、4人の生徒たちのグラフとそれを見て自分自身の分析をした生徒の声である。図8のようにグラフへ直接自己分析を比較的自由に記入しながら、自分を見つめる時間をとった。

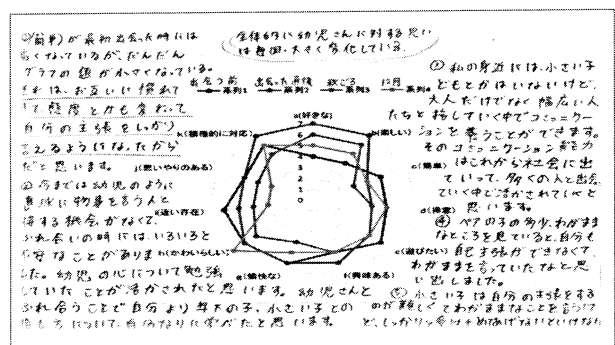


図8 グラフの自己分析

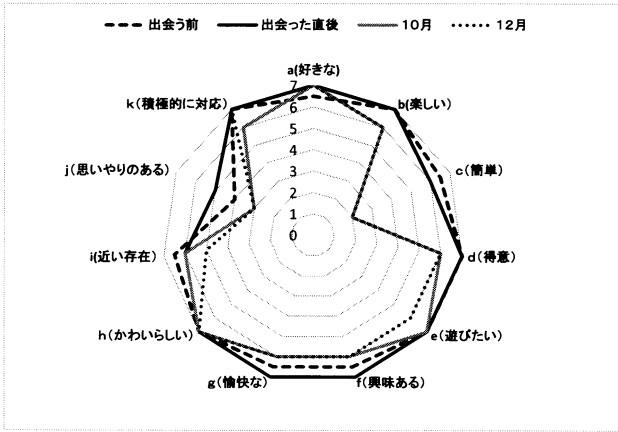


図9 幼児のイメージの調査結果（生徒A）

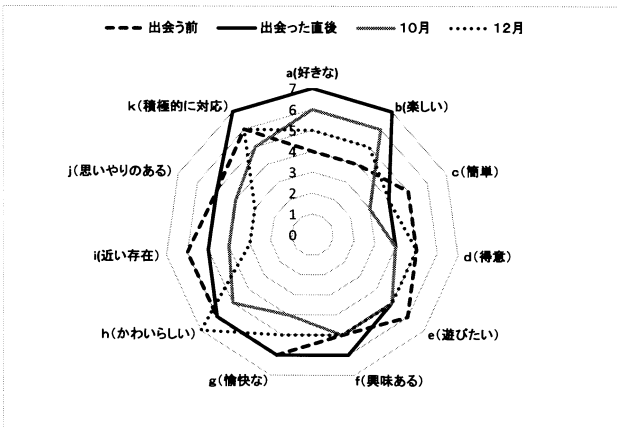


図10 幼児のイメージの調査結果（生徒B）

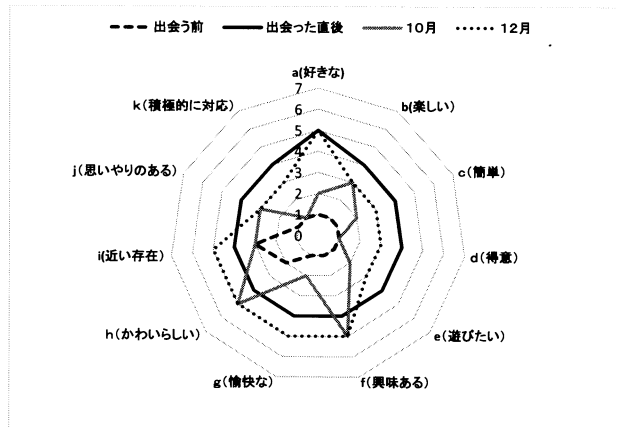


図11 幼児のイメージの調査結果（生徒C）

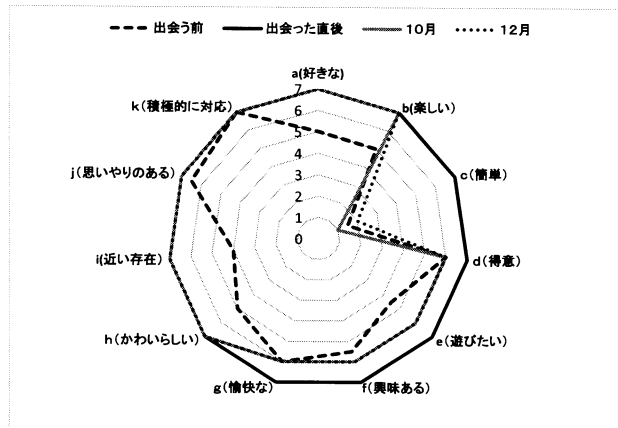


図12 幼児のイメージの調査結果（生徒D）

次に、この結果をみて生徒たちが書いた自己分析や、自分自身を見つめてどのように感じているかを紹介し、考察してみた。

生徒Aの自己分析（図9）

簡単だという項目が秋ごろから一気に下がっているのは、運動会のダンス練習の時にペアさんがなかなか踊ってくれなかったからだと思う。得意という項目も、会う前は自分は自分で得意だと思っていたけど実際にあってみてそう簡単ではないなと思ったから。この体験で、相手の気持ちを考えながら接するのは難しいということを学べた。相手の言っていることをしっかり聞くことが大切だと思う。そして自分は職場体験で保育所へ行くのでその時に生かしたいと思う。

自分が幼稚園の時の年上のペアさんのことは、今でも覚えている。なのできっと私たちのことも覚えてくれていると思う。私は幼児の時、おとなしくてあまり話せてなかったもので、もしかしたらペアさんもそうなのかなと思う。

生徒Aは、心の中の声では、次のようなことを記述している。これまでの幼児とふれあった経験については「小学生のころのペアの〇〇ちゃんとはとにかく元気だった。走り回っていた。一生懸命ついていった。疲れたな。」「年下の弟が、泣いてその場から動かなかった。早く動いてくれればいいのに。」今のペアさんとの出会いにおいては「ずっとブランコで遊んでいるな。別の遊具で遊べばいいのに。他の遊びもしたいなあ。」運動会当日も「ペアさんはゆっくり歩きたいと言ってきた。ゆっくり歩いたら遅れてしまうのになあ。」というようにやはり幼児がなかなか自分の思うように動いてくれないことや、ふれあうことはそう簡単でないことを記述している。

イメージの変化も、はじめは何かかなると思っていたが最終的には、幼児とふれあうことは難しく、幼児自身が思いやりを持っているところを見出すには至っていない。しかし、幼児に対しては肯定的な感情を抱いており積極的に取り組み、職

場体験にも生かしたいと前向きに考えている。

生徒Bの自己分析（図10）

簡単が最初は高いが、グラフの値がだんだんと小さくなっている。それはお互い慣れてきて態度も変わって自分の主張をしっかりと言えるようになったからだと思う。今まで幼児のように直球でものをいう人とは接する機会がなくてふれあう時は色々不安なことがありました。幼児の心について勉強していたことが生かされたと思います。幼児さんとふれあうことで、自分よりも年下の子どもとの接し方について学べたと思います。今私の身近には小さい子どもとかはいないけど、これから社会に出て多くの人とかかわる中で今後生かされると思います。自分のペアの子のわがままなところを見ていると、自分も気持ちを言葉に出来なくてわがまを言っていたなと思いたします。幼児は自分の気持ちをうまく言葉に出来なくてわがまなことをいうこともあるけど、しっかり受け止めてあげるといいなと思った。

生徒Bは、心の中の声を読むと、ペア幼児との遊びの中で「自分だけに砂を投げた。あははと笑って対応したけどなんか悲しいな。」「自分の名前だけ呼んでくれなかった。次は覚えて呼んでもらえるように頑張ろう。」「～をしようという黙ってしまった。接するのは難しいな。でも、もっと○○ちゃんのことを考えてあげよう。」と記述しており、常に接することが難しい状況があっても、それに対して積極的に対応しようとしていることが分かる。幼い子どもと接することの難しさを常に前向きに捉えていることと、自分自身も幼い頃にわがまを言っていた経験も心の中にあり、幼児期に自分の思いをなかなか言葉にできない状況を理解してそれに応じた対応をしようと心がけていることが分かる。イメージ調査のグラフも、だんだんと数値は小さくなっているが、それを幼児との人間関係ができてきたところで幼児が慣れて自己主張をする場面が増えたために接することが難しくなったと捉えているのも、数値

上ではよくないが、幼児とのふれあいを通して幼児についてより深く理解できたことを自分で感じ取る事ができていると言える。

生徒Cの自己分析（図11）

出会う前は、幼い子はあまり好きではなく、嫌悪感すら抱いていた。しかし、出会ってからは無邪気な笑顔に癒されました。かわいらしいなあと思いました。でも、幼児と接するのはかなり難しいということ学んだ。気持ちが全く読めない。まあそれが幼児のいいところでもあるのかもしれないけど・・・。

生徒Cは、はじめのイメージ調査ではほぼ全ての項目が1で、幼児に対してのマイナスイメージが学年中でも一番低い生徒だった。そして、これまでの幼児についての経験を振り返っての心の中の声では「小4の時のペアで僕達の言うことを聞かずに、どこか行ったり、大声でしゃべったり、やりたい放題で、友達と口げんかし始め先生に怒られた。それでも全くおさまらなかった。僕の友達にも暴力をふるっていた。あきらめ半分で注意した。一応怒った。あーもううるさいな、だまっとけよ。なんこいつ。やっぱり幼児はキライだわ。」と記述している。しかし中学生になった今は、ペアが自分にハイタッチをしてくれ、笑顔で応じてくれ、運動会でも楽しく踊ってくれた後は「やったあ。楽しかった。踊ってくれた。」という記述がある。幼児のイメージにも大きな変動があると共に、数値も低いですが、振り返りの時点で、プラスに捉えていることが分かる。

生徒Dの自己分析（図12）

自分自身の変化は実際のペア幼児とふれあう前後で幼児に対する見方の変化が大きいと思う。今自分の家族や親族は年下の子どもが10人くらいいて接することには慣れていたけど、暴れたり自由に動くイメージがあって出会う前はあまりいい印象を抱くことはできなかった。しかし、ペアの幼児さんは接しやすい子だった。なのでイメージ

を変えることができた。幼い子どもは、自分のしたいことを優先して動いていて自分をコントロールすることができないことも分かった。その際には、自分たちがその行動をしていいのか悪いのかを教えてあげればいいのかという考えを持つことができた。幼児と接していて、僕は自分が幼い時にどんな行動をとっていたのだろう、その時に親はどうしていたのだろうと疑問に思うことが幾度もあった。幼い子どもと接することはとても難しい。一人一人の性格や行動、好きなものが違うためその子にあった遊びなどを考えて動くことが特に難しかった。活発な子と接するのも難しいけど、消極的で何も話してくれないことの接し方も難しいと思った。

生徒Dは、出会う前の数値では簡単以外の項目は4以上で比較的プラスに捉えている。そして、ペアとの出会いによってさらに幼児のイメージが肯定的に変化している。また、最後の振り返りでは、自分の家族や親族などこれまでの体験も振り返り、ペア幼児とのふれあい体験と重ねながら、幼児期の子どもたちとかわるのは決して簡単なことではないと捉えている。

以上のように、幼児のイメージ調査そして幼児とふれあった時の気づきと心の中の声を生徒自身に自己分析させたものを次のように評価してみた。

5 自己分析の評価と考察

表3 イメージ調査と自己分析の評価(人)

自己分析に関して	自分の幼い頃や家族のことを振り返っている	自分の幼い頃を振り返っている	振り返って書いてない
幼児のイメージ調査から			
幼児とかかわることは楽しいと感じ積極的にかかわろうとしている。	34	8	5
幼児とかかわることは少し楽しいと感じ少しは積極的にかかわろうとしている。	9	5	4
どちらも言えない。	3	4	0
幼児とかかわることにあまり楽しさを見いだせないが、積極的にかかわろうとしている。	1	0	1
幼児とかかわることは楽しくないし、消極的である。	2	0	0

イメージ調査や心の中の声を分析して、幼児とかかわろうとする態度と幼児へのイメージを5段階で評価したところ上記のような結果になった。

前述の図7のグラフからも分かるように、幼児

とのふれあい体験を肯定的にとらえている生徒が85% (67名) で、約10% (7名) の生徒がどちらともいえない、5% (2名) の生徒が否定的にとらえていた。

全体的には、積極的に幼児とふれあおうとする意欲的な生徒は、自分自身のことも振り返り今後へ生かしたいと考える生徒が多かった。しかし、否定的にとらえていた2名の生徒も、幼児は苦手だという感情を持ち前向きになれない気持ちがありながらも、最後に自分自身の幼児に対するイメージをグラフで見ながらその自分を受け止めて幼いころを振り返り、今後どうしていくかを考えることができていた。

6 成果と課題

幼児とのふれあい体験学習をその時間だけの体験にとどめるのではなく、1年間の軸として位置付けて、幼児に関する様々な知識や衣食そして家族に関する学びとも関連付けて学習内容を展開することができた。そして、幼児についてのイメージや心の中の声に関する調査ができただけでなく、その結果をまとめて個別にフィードバックすることができた。そして、自分と幼児とのかかわりについて、自分の意識の変化を振り返ることのできるまとめができたことは成果である。

調査で分かったことは、幼児とのふれあい体験によって、幼児に対するイメージはプラスになるが、かかわることの難しさについては決してプラスにならないことである。むしろ、かかわるたびに相手のこともよく分かるようになり、課題も見えてくるのが分かった。さらには、その難しさを感じる場面で「自分」についても見つめることができている子どもが多かった。今後は、ペアとの交流で感じ考えたことを、子どもたち同士で交流し、課題解決する場面を授業に今以上に取り入れていきたい。そして、生活へも生かしていくことができるような授業展開にしたいと考える。